

九大比文震災プロジェクト

シンポジウム(2012年3月8日)

「東日本大震災の現場を知る-震災後一年、そしてこれから」

【日時】 2012年 3月8日(午後4時30分開演～8時50分終了)

【会場】 アクロス福岡 7階 大会議室

第一部 講演

(2)鹿糠敏和(岩手日報社、大船渡支局長)

「津波被災の現場から」

最初に感謝申し上げます。このように九州でお話する機会を頂いて非常に嬉しく思います。震災から一年経ちまして、忘れられているのではないかな、という気持ちがあります。震災の被災のエリアは非常に広いですので、復興の槌音とよく言いますけれども、今は、槌音っぽいものがようやくかすかに聞こえてきたかな、というレベルです。実は、5月に全国の人たちを前でお話をする機会があったのですが、その際に「もうみなさん仮設住宅に入られたのでしょうか」ということを言われまして。全然そんなことはなかったのです。みんなが入れたのは、お盆過ぎ位です。こうしたギャップを感じておりました。今回のお話をいただきまして、被災者の方を考えてくださっている方がいらっしゃるということを非常にありがたく思います。ありがとうございます。

私は現在、岩手県大船渡市というところで新聞記者をやっております。大船渡市というのは、お隣に非常に有名になりました陸前高田市がありまして、車で15分位で行けます。陸前高田市はご存知の通り、今回の被災で町全部が亡くなりまして、1800の方が死亡または行方不明となっております。で、大船渡市ですが、こちら町中心部は全部なくなったんですが、陸前高田市と比べると、それでも少ないのですが、426の方が死亡行方不明ということになっております。この大船渡市の簡単な紹介をしようと思うのですが、海の幸が豊かなところでありまして、サンマや牡蠣といった水産の町として成り立っております。北里大学という大学もありました¹。この大学も学生のアパートが三分の一流されてしまって、講義棟が三つ使えないということになりましたので、今、神奈川県の方に移転しております。五年後には帰ってきてほしいな、というところで、運動をしているのですが、実際五年後に町がまた戻っているかわからない非常に厳しい状態になっています。

さて、震災前の大船渡市ですが、サンマ船が漁港にあり、サンマの水揚げでは全国五位くらいのところでした。コンテナ貿易をやったりとかしていました。セメント工場は残っており、こちらのセメント工場では現在、瓦礫を焼いています。大船渡ではセメント工場

¹ 北里大学三陸キャンパスのこと。学生の生活基盤が失われたため、相模原キャンパスに移転している。一部報道では2015年までとしている。鹿糠氏の「町がまた戻っているかどうかかわからない」とは、学生の生活基盤についての懸念であり、復興の重要性を物語っている。

があるので処分ができていますが、他の沿岸のところではやれていないというのが実情です。やれない分は広域処理ということでお願いしているところでもあります。

で、あの日のことを振り返らなきゃいけないと思うので、振り返ろうと思います。私はこの大船渡ということところに来て、今は3年目です。今度の4月で4年目になるのですが、ちょうど二年経ちまして3月11ですね。地震があったときには大船渡市役所にいましたが、これは津波が来る、ということで、撮影をしに行きました。うちの会社の場合は、沿岸に配置されている記者は津波があった場合の撮影場所というものが決まっています。その撮影ポイントであるかなりの高台に向かったのですが、この国道45号が大渋滞でした。信号は停電で止まっていました。そこで、海側の方、よくよく考えたら危ない行動をしていますが、そちらに向かいました。やはり危ないということで、最悪の事態の場合に行こうと考えていた、マイヤというショッピングプラザ、こちらで写真を撮りました。ここで、岸壁を望んでおりました。

津波の浸水エリアですが、事前のハザードマップを見ておきますと、線路を越えないと言われておりました。しかし、これを乗り越えて、この線路より先の地域にいた方、特に高齢の方々は非常に多く亡くなりました。海よりも、山側とでも言うべき地域の方たちが多くなくなっております。

先程いきました岸壁ですが、こちらは、夏であればお祭りをやったりしています。防潮堤が3mから4mのものがあります。津波がこの岸壁をまず襲いまして、溢れて来ました。私がマイヤというスーパーに上がって1分後でした。非常に波がのべっと溢れてくるという感じだったのです。ところがこれがどんどんどん溢れてきて止まらない。最初はぴちゃぴちゃとなるくらいだと思っていたのですが、いつまでも止まらないのです。これも危ないということで、更に上に上がりまして、大船渡の駅を見ました。その時は既に、町が飲み込まれていました。手前のビルは三階建てなのですが、三回まで波が行っていきません。その後、急速な引き波になります。引き波はすごいスピードで家などをどどんん持っていきます。全部引いた後には全部持って行かれました。最大の波が来た後にも何度も波が来ていました。これは意外と逃げた人たちの中には、大きな津波が来た後に第二波第三波と来ることを知らずに、家の様子を見に行ったりした方もいました。こうしたことを知らない方がいるということを知りました。

このように、目の前で家や景色が流されていくわけです。高い位置にありますので、現実感がないのですが、目の前で起こっていることが受け入れられない、という心境でした。ただただ茫然とするしかない、という風でした。最初は騒いでいたのですが、声も出なくなりました。そうした引き波に乗って人が流れてきました。たまたま引き波に乗かって、ビルに突き刺さって、ビルの一回の天井裏に引っかかって助かっていたのです。それを、ホントは怖かったのですが、僕らで一階まで降りて、引っ張り上げました。たまたまこのスーパーの中に歯医者さんがあったので、そこで医療用のガーゼなどがあったので、この

方は一命を取り留めて、今は元気にお仕事をやっております。こういう方は極稀で、一階でも波に飲まれてしまったら、あとはもう、出てこないという人も未だにいます。

さて、岩手日報大船渡支局なんですが、30年、40年かけて積み重ねてきた大事な資料なども流されてしまいました。岩手日報では流されたところは、大船渡支局と陸前高田支局ですが、大船渡支局はまだ形はあるのですが、陸前高田支局はなくなってしまいました。出てきたのは支局長のクレジットカードだけ、あとは全て流されてしまいました。

あの日なのですが、結局一晩ビルの上にはいました。ビルの上において、波が引いて、やっとそこで降りました。降りてからなのですが、電気もないですし、原稿書くスペースもないです。内陸に一時間位行ったところ、そこでやっと電話が繋がったので、その後、盛岡の本社に行きまして、そこでデスクが泣いていたのですが、そこまで覚えているのですが、そこから記憶が途絶えるんですね。大体、一週間位記憶がほとんどありません。取材しているんです、原稿も書いています。あとから見ると、結構えげつない原稿を書いたりしているんですね。原稿書いているのは覚えているんですが、載った紙面を覚えていないというか、後で読み返してみても「なんでこんなオブラートに包まない原稿を書いたのだらう」という感じでした。自分が原稿を書いているんですけども、何かに書かされているというか、ただ目の前の事実には書かされている、そういう感じでした。ただただ目の前の事実には翻弄されているという状況でした。3月20日頃まで記憶があやふやです。

二十日頃のことです。小石浜というところがあります。震災前にも取材をしたことがありますが、その漁師に会いました。最初は打ちひしがれていたそうなのですが、漁具を拾い集めているところでした。海に今回やられてしまった、と。海にやられてしまったが、自分たちは海から恩恵も受けてきたから、自分たちは海で生きていくしかないですし、自分たちのホタテを待っている人たちもいるし、自分たちがやるしかない、ということで、既に立ち上がっている人がいるんですね。そこに会ったときに、私はシャンとして、そこから記憶が正常に動いているのですけれども。そこで始めて、自分の書きたい記事、撮りたい写真というのが見えてきました。僕がここでこの人達に会っていなかったら、震災前に取材していなかったら、多分、まだ曖昧な状態が続いていたのかな、と思います。被災した人たちに僕自身は救われたという感じでした。この人達は今でもホタテの養殖を再開することができました。これも全国のみなさんの支援のお陰で、再開できています。あと一年もすれば、美味しいホタテを全国に届けられるのではないかな、と思います。

もう一つ被災者に救われたのは、越喜来小学校というところなのですが、こちらの小学校も三階くらいまで波が来ました。こちらは最初からヤバいところに立っている、という感覚でしたね。ここの子たちもみんな逃げたんですね。逃げた子たちが3月31日ようやく卒業式を開くことが出来ました。この卒業式の時に、子どもたちは、すごく悔しかったそうです。中学校に入る子たちは制服も流され、自分の家も流され、子どもたちは誰一人亡くなりませんが、おじいちゃんおばあちゃんが亡くなっていました。でも自分た

ちが復興させるんだ、という気持ちで泣きながら作文を読んだりしていました。この時、本来記者というのはあくまで黒子ですし、表に出ないで、自分の感情をできるだけコントロールしながら、感性も豊かにしながら、非常にバランスを取りながら取材をしなければいけないということなのですが、私は取材をしながらボロボロ泣いてしまいました。後にも先にも取材をしながらここまで泣いたことってのはないです。私と大船渡のエリアだけでやっている新聞社があってその記者だけ泣いていました。このあと、ようやく、感情をコントロールできるようになったと思います。この子たちのお陰で、取材しながら、僕も救われていった、という気がします。

震災直後のことですが、とにかく一番知りたかったのは安否情報でした。安否情報というのは、誰が活着ているのか死んでいるのか、ということです。テレビが見られません。ラジオは聞けるんですが、そんなに持っている人はいませんでした。ネットは繋がりませんし、携帯もつながりません。Twitterなどで情報が出ていたようなのですが、こちらでは何も見ることができないし発信もできないという状況でした。なので、あちこちで避難者名簿というものが貼り出されていました。これを、全部記者がまわって、デジカメで撮って、それを原稿化するということをしました。原稿では、黒丸になっているところがあります。手書きのものを写していますので、わからない字などもあるので、こうなっています。本来新聞は、わからないものや正確ではないものは載せないのですが、この時は少しでも、情報の断片でもあれば、親戚や兄弟や親子であればわかるのではないかと、ということでみんなに知らしめねばならない情報だということで、こういった形で出しました。合計役 5 万人分の避難者名簿を出しました。被災地に居ない方ですと、個人情報はどうだとかそういうことを言われるかもしれませんが、あの時はみんな知りたかったのです。むしろ、よく出してくれた、という風に言ってもらえて、何よりも避難所で多く読まれたということが、役立つことができたのかな、と感じました。

陸前高田についても少しお話をしておきたいと思います。今、陸前高田の支局が流されてしまっているの、合同で、やっております。その陸前高田の支局長から「陸前高田に全国から多くの支援をいただいでいて、感謝を是非伝えて欲しい」と頼まれております。陸前高田なのですが、最初の震災前のハザードマップですと、市役所や市立図書館の辺りに避難場所があったのですが、波はそのもっと奥にまで行ってしまったのです。先ほどの都司先生がおっしゃった「避難所で亡くなった」というケースが非常に多いところ。うちの支局長は避難先で川を見ていたそうなのですが、波が川を遡って来ております。また、そこから「奇跡の一本松」と呼ばれるものも撮影しています。七万本ある松のうち、一本だけが残ってしまって、後は全部流されてしまっていたのです。この七万本の松が防潮林になると考えられていたのですが、流されてしまいました。山側の方になると、松原の松が凶器になって家に突き刺さったりもしています。

うちの会社は沿岸 7 地点で撮影しています。宮古ですね。宮古の防潮堤を波が越える瞬間

間なども撮影しています。撮影しているんですが、この写真を掲載したのは、5月頃に掲載しました。すぐに出す気にはなれなかったのです。社内で議論をしながら、「記者の撮った写真が見たい」とか「うちの家がどうやって潰れたのか」という問い合わせが出始めてから出しました。今回は記録が沢山残っていますので、風化させずに生かして欲しいという思いはあります。

全国からだけでなく、全世界から支援が来ました。アメリカであるとかイギリス、オランダ、中国とかから救助犬が来ましたし、自衛隊も全国各地から来てくれました。医療、心のケアとかのチームの人のケアも来てくれました。九州からもですね、本当に、物心両面の支援をいただきました。五島列島の方たちが、突然やってきて、うどんを煮始めてくださったり、熊本のスイカを福岡県のトラック協会の方が持ってきたりとか、佐賀の心のケアの方たちですね。服とかも流されてしまいましたので、福岡の柳川市の方が支援をしていただいたりとかですね。古賀市の会社の方がテントを作ってくれたりとか、あと、九州大の先生が陸前高田に入っていて心身のケアとかをしていただいたりしております。この間は、西日本新聞の方が子ども記者というのをつれてきて下さいまして。子どもたちが実際に現地で取材をしてくれる、ということがありました。我々、報道機関というものはよくないところでもあるのですが、記念日報道という言葉があります。要は震災から一年とか、最近、よく、震災の報道とかが多くなっていると思います。正直、私はまだ見たくない映像などもありますので、見ないでいることもあるのですが。そうした記念日報道というものが、半年でもあったのです。すごく沢山のいろんな報道機関が報道してくれたのですが、半年終わったら、パタリと無くなってしまったんですね。お盆に親戚が来たんだけど、お盆が過ぎたら帰ってしまって急に寂しくなってしまった、という感じでした。そんな寂しかったときに、西日本新聞の子ども記者の方たちが来て、伝えてくれる、ということはすごく嬉しかったです。

震災から1年経ちますが、野球場に、仮設住宅が立っています。仮設の商店街というものが年末にやっと出来ました。買い物とかができるようになりました。サンマなども水揚げできました。なんとか震災前の六割までできています。大船渡の方は水産に関しては割りりと復興はいい感じで進んでいます。サンマに関しては、他のものに関してはそうではありません。これは漁船があればいい、漁師さんがいればいいというわけではないですね。それをきちんと買ってくれる人がいないといけないわけですね。水産加工会社というのが買って、スーパーに下ろしてくれないと、直接スーパーが買い付けることもあるのですが、水産加工会社が復旧していないと、沢山とっても買ってくれる人が居ない、ということになるのです。先週なのですが、わかめがようやく育ちまして出荷できるようになりました。ただ、雇用の方は厳しいです。求人は出てきました。がれき処理であるとか、建築とか道路の復旧作業というのがでているのですが、なかなか女性の働ける場はないですし、また、非正規ばかりなので、職業にしても、長いこと働きたいというマッチングはないの

で、内陸や他のところに引っ越すというパターンも出てきています。これから復興への道のりということなのですが、どこに住んだらいいのか、というのがまだ見えません。防潮堤を作って町を守るとか、土地を嵩上げする、とか高いところに移るとかそういうパターンがあります。どこに住んだらいいのか、働きたい仕事はあるのか、というものが問題になります。そして、どんな町にしたいのか、ということもなかなかまとまりません。そして津波からちゃんと逃げられるのか、という視点もあります。これらが大きな問題です。そして、もともと岩手県の沿岸というのは疲弊した地域でした。私も実は今回被災した久慈市というところの出身なので、そうしたところで育った人間なのですが、もとに戻すだけでは、震災前からの課題である、人口減、少子高齢化、財政難などに対応できません。こうしたものを網羅した復興はできないものかと考えています。ただ、いろんな縛りやしからみがありますので、なかなか難しいところがあります。

どこに住めばいいのか、というのは大きな問題の一つですが、まず、地盤が1m位沈んでしまっています。なので、満潮時には波が来てしまうのですね。「毎日津波だ」と言っている人もいるくらいで。今まで住んでいたところが海になってしまうということがあるので、そういうところに住むというのは難しい問題です。高台移転するというのも出ていますが、高台移転するときには五戸以上がまとまって上がらなきゃいけないのですけれども、隣近所と言っても、それぞれの住んでる環境っていうのは違います。核家族もいれば、一人暮らしもいて、三世帯、四世帯で暮らしている家もあります。そういう人たちが同じ条件で上がるというのは難しいということがあります。そして、被災した土地を買い取ってくれるのか、つまり、被災したのでお金がないから家を立てられないだろう、とか。そういう人には集合住宅に入ってください、ということがあります。集合住宅は大船渡では1LDKとか2LDKとかくらいしか住めないの、8人とか9人とか住んでいる場合にはどうすればいいのか、とか。そういう場合には、家族分離して住んでくださいということをして市のほうでは言っているのですが、それはやはりどうしても避けたい、ということが絡まりまして、なかなか進まないところです。進んでいるところもあるのですが、全体を見ると難しいところではあります。復興にあたっては、住民の身近な願いというものもあるのですが、同時に広い視野が必要ということになります。特に、次の世代が生きやすいということが必要になります。高齢者の人たちが元気な地域ですので、高齢者の意見が通りやすいのですが、若い人たちがいかにそこで暮らしていきたいのか、という発想、仕組みを作らなきゃいけないという状況です。みんな焦っています。一日も早く、復興をしたい、住む場所を決めたい、という思いがあります。焦りもありますので、積み重なっていることが大きいので、そこら辺のギャップやいらだちが溜まってきています。

さて、一昨年、チリ津波、というものが来ました。その時は1mに満たないものだったのですが、その時に様々な教訓がありました。備えをすべきだ、とかいうことがありました。大船渡という場所は、1960年のチリ津波のときには日本の中では最大の被災地になっているのです。53人が亡くなっているのですが、その時のインパクトが強すぎて、そのチリ津

波の時のものをハザードマップの基準にしていました。あれが一番大きな津波なのだから、それ以上のものは来ない、という思い込みがあったのです。実際にそういった思い込みで亡くなった人立ちもいます。まだ、当時は家とか残っているのです。そうではなかったわけです。

先程、都司先生からお話があった田老町の話もしておきたいと思います。実は、先程、古い堤防と新しい堤防がある、ということでした。これは田老の人たちに言わせるとですね、新しい堤防というのは、海に対して、新しい町を守るために作られたのです。古い方は、もともと津波から守るつもりはなかったそうです。津波が来て、防潮堤でちょっと止まっている間に、その間に高いところに逃げましょうという、避難のための時間を稼ぐためのものだったそうです。構造物で津波が全て守れるわけではないし、陸前高田のおじいちゃんがこれは震災前に言っていたことですが「常に人間の予想を上回るのが津波だ」ということを言っていました。構造物に全部頼っていてはダメなのですね。そこら辺を言っていたはずなのですが、いつの間にかそこら辺が忘れられていった、ということがあったのです。本来、防潮堤の外側に家を作る、ということがあってはいけないことがあったために、そして、それがあるから安心だ、ということを考えてしまっていたのです。大船渡の場合は、湾口防波堤というものがありました。これは今回の津波でキレイに全部ぶっ倒れてしまいました。そういったものを心のどこかで頼っていた部分があります。チリ津波の場合に、線路の前までにしか波が来なかった。しかも、防潮堤や防波堤がある。ここより上は来ないだろう、という風に思ってしまった。それが今回の亡くなった人たちを生み出した原因の一部があると思われま。どこかでハードを信頼しすぎていたところがあるのではないかな、と思います。

終わりに、ということですが、震災から1年ということ。1年という節目がどういうものなのかはわかりませんが、一応、一周忌ということで、今、多くの遺族の人を取材しております。たくさんのお話を聞くというのが我々の仕事ですので、いろんな方に会っているのですが、今はみんな、復興に向けて希望を何とか見出そうというので、前を向いて立ち上がっている、日もあります。でも、心の中で泣いている日もあります。目の前で自分の大事なものを失った、友人や親戚を亡くしていたりもします。そうしたものは戻って来ません。建物とかは戻ってくるでしょうし、亡くなった人たちに恥じない町を作ろうという思いもあります。やはり、人は戻ってこないわけです。大事な人というのは。それはたとえ1年経とうが2年経とうがやはり変わらないものであって、そういったところを寄り添いながらやるしかないと思うのです。この間、神戸新聞の方に会った際に「神戸の復興というのはいつ終わるんでしょう」と聞いたところ「復興というのは、家族を亡くした遺族が全て天寿を全うしたときに終わります」と言っていました。人々の気持ちというのはそういうものだというのです。私も、同じ状況にいて「そういうものなのだろうな」と思います。ただ、やはり、地域を作っていく上では、今回紹介した子どもたちがおとな

になった時に恥ずかしくない、この子たちが生きやすい町を作らなければならないと思います。そのためには、なかなか経済的にも厳しい状況にもありますので、そういった中で、皆さんからの支援というものはもちろんありがたいです。そして、それと同時に被災地のことを忘れないで欲しいな、という思いもあります。スーパーに行って、こちらではなかなかないと思いますが、大船渡産とか岩手産とかがありましたら、手にとってみて欲しいと思いますし、放射能検定もやっておりますし。買って欲しい、というのもありますし、ちょっとしたときに、思っただけ、そうしただけ、すごくありがたいと思います。東北に来ていただければ嬉しいですし、歓迎したいと思っております。

非常に感傷的な話になりましたが、今回のお話はこれで締めさせていただきたいと思っております。